

同志社大学第35代学長就任にあたって —同志社と神学部—

小原 克博

同志社は2025年に150周年を迎えます。同志社英学校が設立された翌年の1876年、熊本からやって来た20余名のキリスト者学生を迎えて「余科」をつくり、神学や聖書の授業を始めました。これが神学部の起源であり、神学部は同志社とほぼ同じ長さの歴史を有するだけでなく、その精神的支柱であり続けてきました。戦後の同志社大学は、今出川校地を拠点に、長らく6学部（神学部・文学部・法学部・経済学部・商学部・工学部）体制でしたが、1986年には田辺校地（現・京田辺校地）が開校し、その後、改組や学部・研究科の新設を経て、現在では14学部、16研究科を擁する大学へと規模を拡大してきました。学部と大学院を合わせると、3万人弱の学生が同志社大学で学んでいます。

大学が大きくなることのメリットはもちろんあります。しかし、どのような組織も形骸化しないためには、スケール・メリットを享受すると同時に、大きくなったがゆえのスケール・デメリットを直視する必要があります。二つの校地に分かれ、組織が肥大化・複雑化する中、大学全体が一体感や理念を生き生きと共有することは、とても難しくなっています。それゆえに、150周年という大きな節目を迎えようとする今、同志社大学が、キリスト教主義をはじめとする設立時の理念や精神を再確認し、私学のアイデンティティを新たな思いで共有することは、とても大切です。新島襄が遺言（1890年）に残した戒めの言葉「同志社は隆（さかん）な



るに従い、機械的に流るるの恐れあり。切にこれを戒慎すべき事」は、今の時代においてこそ、耳を傾けるべき価値を持っています。

私は2020年度から4年間、学部長を務め、神学部の発展のために微力ながら努めてきましたが、同時に神学部の存在が同志社大学の中で正しく認識され、同志社の精神的支柱としての役割を果たすことができるようにと心を砕いてきました。

2024年度より、私は同志社大学第35代学長に就任します。同志社創立150周年という大きな時代の節目に立ち会う学長として、同志社を同志社たらしめる精神に立ち返り、人と社会に仕え、新たな価値を発信・実践できる大学となるよう尽力したいと考えています。

神学部教員が学長になったのは、大下角一氏（学長在任期間1954～60年）以

来、約70年ぶりとなりますので、「なぜ神学部から？」という声もあるようです。私が学長に就任することは、短期的に見れば、神学部に対し、学部内業務を十分に負えないことから、ご迷惑をおかけすることになります。しかし、長期的に見た場合、同志社における神学部の確たるポジションが認知され、「神学部あつての同志社」と多くの方に言っていただけるよう、学長としての職務に全力を尽くしたいと考えています。また、挑戦的な教育プログラム・研究プロジェクト、文理融合や産学連携、各種メディアを通じた発信など、私が得意とする領域でも、引き続き、同志社のために手腕を発揮していきたいと思っています。

私が掲げているビジョンは「同志社ルネサンス」です。150周年は、同志社にとって新たな船出の時となります。変化の著しい現代世界の荒波の中でも、同志社は「智徳併行」「良心」「自由主義」「深山大沢」など、新島襄に由来する固有の価値を持って、進むべき進路を見出すことのできるポテンシャルを持っています。これらは他大学に真似のできない価値であるとも言えます。そうした同志社オリジンを「再発見」「再解釈」し、現代社会をリードする新しい価値を生み出すことができれば、それは「同志社ルネサンス」（同志社の再興・再生）となります。同志社が比類なき輝きを放ち、「地の塩」「世の光」として社会に貢献する新時代を切り拓いていきたいと願っています。

これまで同様のご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

神学部の近況報告

神学部長 小原 克博

今号の『同神期報』は記念すべき100号となります。それゆえ、今年度の神学部の様子を紹介すると共に、今の神学部を語る上で必要な歴史的背景についても少し触れたいと思います。

■入口と出口の状況

18歳人口の減少が進む中、どの大学、学部も気を揉むのが入試の状況です。神学部は定員63名を満たすため、推薦系の入試、一般入試等、各種の入試を行っています。今年度の志願者数は昨年度とほぼ同じでした。近年、志願者数は比較的堅調に推移していますが、気を緩めることなく、神学部の魅力を積極的に伝えていきたいと思っています。

秋に行われる推薦系の入試では、全国同信伝道会（同志社系の教会を基盤とする組織）が主催する、高校生向けの東西のキャンプの参加者が出願するケースが多く、こうした連携も維持・強化していきたいと願っています。

入試という「入口」に続けて、学生の卒業後の進路という「出口」についても簡単に報告します。大学生の就職内定率は3年連続で上昇し、コロナ禍前の水準に回復しつつあるという状況もあり、神学部でも就職希望の学生のほとんどが内定を得ています。近年、多くの学生が3年次生の頃からインターンシップを始めますので、大学の授業との両立が難しい時期もあります。しかし、神学部に関心あることをしっかりと学んだ学生たちは、就職活動においても、よい結果を出しています。

■カリキュラムの見直し

今年度、神学部が時間をかけて取り組んできた作業に、カリキュラムの大幅な見直しがあります。全学的にカリキュラムの再検討が進められており、神学部も久しぶりに大幅な見直しをすることになりました。神学部の自由な学習スタイルは維持しながら、各専門領域で体系的に学びを

進めることができるよう科目を整理したり、また、一人ひとりの学生が多面的な力を卒業までに習得できるよう、ゼミの再編などを通じて、よりきめ細かな教育を目指しています。

これまでも小幅なカリキュラム改定はありましたが、現在の神学教育の土台となる改革は1970年に行われました。学生の自由な学びを可能とするため、専門の必修科目を減らし（4単位のみ）、演習科目を増やしました。また、1971年度の入試から、牧師の推薦状を必要書類から外し、教会と直接関係のない受験生の受け入れを開始しました。

カリキュラムは神学教育のあり方に直結しますので、目下の議論の中でも、神学部の伝統や歴史を振り返ることが度々ありました。現在、学校法人同志社では150周年事業の一環として『同志社150年史』の編纂を進めています。その一部として、神学部にも「神学部・神学研究科」の歴史を書くように求められ、村上みか教授と私が分担執筆しました。執筆の際、もっとも有益であった資料の一つが本誌『同神期報』でした。膨大なバックナンバーのページを繰り返しながら、今は天上の人となった先生方の言葉に触れ、神学部および神学教育が多くの先人たちの努力によって築かれてきたことを、ひしひしと感じることができました。次に、現在の神学教育につながる歴史の一部を簡単に振り返ってみたいと思います。

■神学教育の昔と今

1990年代半ば、インターネットが普及し始めましたが、それ以前から、野本真也先生が「聖書とコンピュータ」といった授業を担当しながら、新たな情報技術に対し積極的な対応をしていました。そのような先駆的な取り組みが、後に神学部がインターネットを利用した教育を展開する素地を作ったと言えます。2001年度から、大学設置基準の変更に伴い、イン

ターネット等による遠隔授業でも単位取得が可能となりましたが、全国に先駆けてインターネット授業を行ったのは神学部でした（小原が担当）。その頃から、神学部はITに強いという学内の評判を得ており、そうした蓄積は、現在のALL DOSHISHA教育推進プログラムに採択された「社会実践のためのブレンディッド・ラーニングの構築—「地の塩」プロジェクト」に引き継がれています。

米国同時多発テロ事件（2001年9月11日）も、神学部の教育・研究に大きな影響を与えることになりました。9・11が世界にもたらした影響を真摯に受けとめ、21世紀にふさわしい神学教育・研究のあり方を議論し、その結果、三つの一神教を総合的に扱うための一神教研究を展開する決断をしました。新たな研究の拠点として一神教学際研究センター（CISMOR）を2003年に設立しました（初代センター長は森孝一先生）。また、2005年度から、大学院神学研究科に「一神教学際研究コース」を設置し、キリスト教神学の他、ユダヤ教やイスラームを学ぶことのできる体制を整え、学部レベルでも三つの一神教を学ぶことのできるカリキュラムを整えました。目下のカリキュラム改定においても、一神教研究の特徴をいかに生かすか、議論がなされています。

神学部は全学的な教育にも貢献してきました。2005年度以降、同志社科目「建学の精神とキリスト教」を、キリスト教を専門とする教員の多くが担当してきました。その多くはインターネット授業となっているため、今年度も履修登録者1000名を超える大規模クラスがいくつかありました（私のクラスは1700名）。新島の精神をもっとも色濃く継承している学部として、新島が「同志社大学徳育の基本」と定めた「キリスト教主義」（同志社大学設立の旨意）を全学に伝えることは、神学部が担うべき不変の課題であると言えます。

神学部長・神学研究科長 就任にあたって

関谷 直人

私の役職定年ギリギリの2024年度、「卒業記念」のような形で神学部の学部長を拝命いたしました。神学部では入社以来、数年を除いてずっと何らかの主任を担当してきましたので、会



議で座る席が少し変わるようなことですが、それでもこの1年間、他の主任の先生方に助けられて、しっかりと神学部の運営をリードしていきたいと思っています。

喫緊の課題としては博士課程前期を経て日本キリスト教団の教師となろうとする学生の数をどう確保するか、また、本神学部から大学院に上がってくる学生をどう増やしていくかなど、大学院に関連する課題が多い印象です。一方で、2025

年度からは、学生さんたちが直感的に自分の進路に応じた科目を見つけられるようにするための「カリキュラムマップ」の提示と、その目的のために整えられた新カリキュラムが始まります。これ以外にもキリスト教を中心としながら、ユダヤ学、イスラームを含めた「一神教」の学びが受験生の目に魅力的に映るようになるために、様々な角度から果敢にチャレンジする1年にしたいと思っています。

研究・学術交流

同志社大学にはあまたの研究センターがあり、いくつかの等級に分けられています。上位の等級に位置づけられると、資金や設備の面で大学からの潤沢な支援があります。一神教学際研究センター（CISMOR）は、2003年の設立以来、最上位の先端的教育研究拠点に位置づけられ、専用の事務室・図書室に、専属の事務員と研究員（有期）を雇用する予算を大学から与えられてきました。しかし、2022年度に行われた全学的な研究センター設置基準の改定と各研究センターの事業評価の結果、CISMORは先端的教育研究拠点の地位を失い、地位に伴う支援も終了することとなりました。

このタイミングで、それまでの数年間センター長を務められたコヘン先生が退任され、2023年度から私、森山がセンター長を仰せつかることとなりました。センター長としての私の最初の仕事は、CISMORに対する新たな位置づけを確保し、存続を図ることでした。この点については、コヘン先生の助言や、グローバル・スターディーズ研究科の中西久枝先生が、ご自身の科研費基盤研究Aによる研究プロジェクトをCISMORの研究事業としてくださったことなどもあり、中核的研究拠点という位置づけで2024年度末までの存続が決定されました。2025年度以降は、センター長やリサーチフェローが科研費基盤研究B以上の外部資金を獲得できれば中核的研究拠点として継続されますし、外部資金を得られなければ学際的研究拠点に格下げとなります。

なかなか厳しい状況ですが、研究活動の面では、2022年度までに準備されていた事業が予定どおりに実施され、『日本におけるキリスト教フェミニスト運動史』合評会（2023年7月）や第12回ユダヤ学会議（2023年9月）など、様々な研究会・講演会が開催されました。運営面においても、神学部から待辰館に事務室兼図書室を借りることができ、2022年度までの予算の未執行分を3年間は継続して使用できるということで、事務員1名を雇用することができました。

とはいえ、研究員の雇用は継続できず、人手は大きく減りました。少ない予算と人員で研究活動を安定的に持続できる体制の構築に向けてやるべきことは色々あるのですが、どこから始めれば良いものか、何となく手を付けかねていました。それに対して表だって苦情が寄せられることもないのですが、いつまでも放っておくわけにもいきません。喫緊の課題は、20年間にわたる継ぎ足しによって構造が非常に複雑になっている上に、最新の規格に追いついていないウェブサイトの全面改修です。サイトはセンターの顔ですので、そのあたりから地道に進めていこうと思います。（CISMOR事務局）

留学便り

神学部3年次生 田部井 瞭

私は2022年度秋学期の約半年間をドイツのチュービンゲンへ留学しました。チュービンゲンはバーデン・ヴュルテンベルク州の中央に位置しており、美しい旧市街や中世の街並みが残る大学都市として有名です。人口9万人のうち約3分の1の3万人が学生であり、学生にとって非常に過ごしやすい街だと感じました。

私は留学中、神学部で学んでいる宗教以外にもEUの政治や経済、人権問題など幅広い分野について学びました。現地の先生が行う授業は全て英語で行われるため、英語を話す力、聴く力が非常に問われました。高校生の頃から大学



での留学を志していたので、大学入学直後から語学学習に力を入れていましたが、先生方の話す英語スピードや学問用語を理解するのに非常に苦労しました。毎日の課題も多く、課題をこなさなければ、次の授業を理解するのも困難になるので、毎日が忙しくあつという間に時間が過ぎていきました。

また、私は大学の学業以外にも、ホッケーやクエッチと呼ばれるスポーツの課外活動に参加したり、現地のサッカーチームに所属したりするなど様々なことに積極的に挑戦することを意識していました。なぜなら、私は、高校2年生の頃にニュージーランドに1週間のホーム



ステイの経験があるのですが、自ら積極的に行動をしなかった結果、ホストファミリーと良好な関係を築くのに時間がかかってしまい、思い描いていた留学生活を送ることができなかったという少し苦い思い出があったからです。積極的に新たなスポーツを体験したり、ドイツ人のチームメイトと同じ目標を掲げて活動したりしたことで、複数のコミュニティで多くの友人を作ることができ、非常に充実した時間を過ごすことができました。

休日にはドイツ国内やフランスやチェコなどヨーロッパの他国を観光したり、遠藤航選手や伊藤洋輝選手が所属していたシュツットガルトでサッカー観戦をしたりするなど日本では体験できない経験をすることができ、非常に濃密な時間を過ごすことができました。特にブンデスリーガ(ドイツ・サッカー1部リーグ)を生で観戦できたことは、幼い頃からサッカーをしていた私にとって、とても楽しい一時でした。

チュービンゲンでの毎日はとても濃く、非常に充実した時間でした。体調を崩したり、大変に感じたりしたときもありましたが、多くの友人や周りの人に支えられ、沢山の学びを得ることができました。高校生の頃から志していた留学をチュービンゲンという素晴らしい街で、出会えた素晴らしい友人たちと過ごせたことに幸せを感じています。

「地の塩」プロジェクト

勝又 悦子

「地の塩」プロジェクトも5年目を迎えました。春学期には「宗教と社会活動」にて、愛隣デイサービスセンター、バザールカフェ、きょうと夜回りの会での活動を重ねました。入学したての一年次生も多く、これまでの環境との違いに戸惑いながらも、積極的に活動に取り組みました。最終回は動画で各自の学んだことをまとめて報告しました。新規開講の「宗教と国際社会」はバングラデシュでの学びを成功させました。秋学期の「宗教と社会



止揚学園フィールドワーク

福祉」では、コロナ禍を経て止揚学園でのフィールドワークが全面的に再開されました。合同フィールドワークで訪れた日は、その2日前に昇天された、Mさんのお父様を止揚学園でお見送りする会に重なりました。「生と死が共生する止揚学園のありのままの姿を知ってほしい」との福井先生のご意向により、私たちもお父様のお見送りの会に参加させて頂きました。笑いもこぼれる温かな会で、私たちも家族として受け入れられていると強く感じま



東九条フィールドワーク

した。学期末の全体報告会では、止揚学園のインドの姉妹校の先生方を始め、多くの方々にご参加いただき、「地の塩」プロジェクトの広がりを感じました。12月には、有志で京都市地域・多文化交流ネットワークサロンのご協力で東九条の歴史を街並みを実際に歩いて学び、苦難の歴史を未来に向けて転換させていく街のエネルギーを感じました。皆様のご支援のお陰で充実した学びを達成することができたことを心から感謝申し上げます。



報告会

新規科目「宗教と国際社会」の報告

小原 克博

ALL DOSHISHA教育推進プログラムに採択された「社会実践のためのブレンド・ラーニングの構築―「地の塩」プロジェクト」の一環として、2023年度に科目「宗教と国際社会」を新設しました。この科目は、バングラデシュにおける社会問題や環境問題と向き合うことにより、国際的な視点で物事を見る力を養い、また、国際社会における宗教の役割を考える力を身につけることを目標としています。バングラデシュは、近年、めざましい経済発展を遂げながらも、児童労働、児童買春、児童結婚、環境問題、少数民族差別など、多くの深刻な社会問題を抱えています。現地のキリスト教系NGOデライト・ファウンデーションの協力を得ながら、8月24日～31日、現地でのフィールドワークを行いました。4月から7月までは、教室での事前授業を通じて、バングラデシュのことや、国際社会と宗教の関係について学びました。ここではフィールドワークの様子を簡単に紹介します。今年度は私が6名の参加学生を引率しました。

首都ダッカから宿泊地のゴバルガンジに向かう途中で、バングラデシュの喧噪著しい都市の風景から、日本ではもはや見ることのできないような、ヤギ、牛、犬などの動物と人間が共生している集落の風景までを連続的に見る中で、人々の生活の多様性を知ることができました。

ゴバルガンジのデライトファウンデーションの施設では、バングラデシュの各地から家族を離れて共同生活している子どもたちと交流しました。朝の礼拝の時間も共にしました。家庭環境の悪化や児童売買など、様々な理由により、故郷を離れざるを得なかった子どもたちとの出会いは、学生たちに多くのことを考える機会を与えてくれました。

宿泊場所は川の近くにありましたが、その周辺の集落は、日本ではもはや失われたような風景が広がっていました。様々な野生動物との出会いも新鮮でした。牛の乳搾りをし、翌日、それを飲むことを通じて、我々が普段口にして

いるのがどのように作られているのかを実感し、消費者としてのみ生活し、生産者の視点を失っている日常に思いをはせることができました。

バングラデシュ南部のシュンドルボンへのボートツアーでは、さらに多様な野生動物や雄大な自然と出会い、また、天候の急変により川の水かさが一気に上昇し、突風に吹かれる中、自然の厳しさも経験することができました。

デライトファウンデーションを離れる際には、学生たちも子どもたちも涙を流して別れを惜しんでいました。子どもたちの人生に、自分たちが忘れがたい記憶を残したことを学生たちはかみしめていたのではないかと思います。

学生たちは短い期間の中で、密度の濃い異文化体験をすることができたことを、帰国後の成果発表会でも感じ取ることができました。世界の課題に向き合うための神学部におけるフラッグシップ的科目として、本科目を今後も発展させていきたいと考えています。



ホロコースト記念館 訪問報告

アダ・タガー・コヘン & 石井田 恵(神学研究科(後期課程)3年次生)

2023年に入り、同志社大学神学部にユダヤ学のための寄付がありました。そこで、この寄付金を活用して、教員3人とユダヤ学に興味のある院生と学部生13人の計16人で11月11日(土)に広島県福山市御幸町にあるホロコースト記念館



を訪れました。

ここは第一～第二次世界大戦中にドイツやヨーロッパでおこった反ユダヤ主義についての教育機関で、中学、高校生が多く訪れている施設です。強制収容所に残されたユダヤ人の遺品の展示に触れ、本物を見て触って感じることは学生にとって貴重な経験となったようです。また、アンネ・フランクの隠れ

家、部屋の再現もあって、少女の視点から反ユダヤ主義について考えさせられたという感想もありました。最後は記念館の外に植えられているアンネのバラ(アンネの父であるオットー氏から贈呈されたバラ)の前で記念撮影を行いました。

今回の訪問を通して、学生たちはホロコーストが実際に起きたということ、また反ユダヤ主義に対して傍観的態度を取るのではなく「自分のできることを大切にしていきたい」という思いを強くしたようでした。「可能ならば毎年実施してほしい」という要望もあがっており、継続したいと思っています。

私のチャレンジ 二つのチャレンジ～「牧師」と「事業」～

後宮 嗣(2023年3月 神学研究科修了)

2023年3月に神学研究科を修了し、4月より世光教会の伝道師に着任しております。

在学中には、関谷先生と越川先生などから実践神学を中心に学び、また、日本プロテスタント史や宣教の歴史を学ぶ中で、「教会」と「社会」とは、常に接点を要する緊張関係にあるということを学びました。

吉岡牧師(高槻日吉台教会)と二人で2022年に設立したグレープヴァインという会社は「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。」(ヨハネによる福音書15章5節)という聖書の言葉を理念に、「事業」による「宣教」、「教会」と「社会」との新しい接点の創出」という使命を持つ、教会の持つ社会的機能を補完する器と位置づけ、日々活動しております。

私たちは、現在「二つのチャレンジ」を行っております。一つ目のチャレンジは「事業」です。2023年11月に二条駅(京都)付近に『ホテル エクレシア』をオープンいたしました。当初から「ホテルを経営したい」と考えていたわけではありません。

私たちは、ひとり親家庭となった友人や同世代の方の話聞くなかで、そ



ホテル正面



画：具 本曙(神学研究科2年次生)

の環境による育児疲れ、社会的孤立、そのお子さんの学習機会の格差、キャンプなどの自然体験の不足などという問題が想像以上に深刻であると痛感いたしました。

そこで、こうした状況の「ひとり親家庭の方々」が互助共助しながら生活できるシェアハウスを設立し、地域教会や牧師の方々を連携しサポートを行っていく」という仕組みを創りたいと考えておりました。

しかし、多様な背景を持つ母親やお子さんが安心して暮らすことのできるセキュリティ性の高い物件がないこと、また、継続的に活動資金をどのように捻出していくのか、という大きな課題に直面し、計画が難航しておりました。

そのような時、教会の関係者より「ホテルの物件がある」という情報をいただいたことから、「ホテル内にセキュアなシェアハウスを併設し、ホテル事業で活動資金を調達する」という構想を思いつき、数多くの方々にご支援をいただきながら、昨年11月に『ホテル エクレシア』とシェアハウス『ミオ エクレシア』を創ることができました。

もう一つのチャレンジとは、教会との接点として機能するために、こうし

た活動を「教会の牧師(伝道師)」という立場で行いたいと考えているということです。現在、この活動に快く送り出してくださっている教会の方々には、本当に感謝しております。

これらのチャレンジを通じて、本学の大学院で学んだ実践神学の社会的実践の方法として、また、現代における社会的宣教の一つの手段となりえるよう努力して参ります。温かく見守っていただけると嬉しいです。

2023年12月26日 テレビ大阪「やさしいニュース」より



新任教員紹介

黒柳 志仁

(くろやなぎ・ゆきひと)

はじめまして。この度、2024年度から同志社大学神学部にて赴任いたしました黒柳志仁(くろやなぎ・ゆきひと)と申します。2005年まで大学院神学研究科に在籍して以来、多くのご指導を頂いた母校で、教員として着任させていただくことに、大変身の引き締まる思いしております。

専門はヘブライ語聖書(旧約聖書)、特に詩編、知恵文学、古代イスラエル史の分野です。聖書釈義を通してヘブライ語やギリシア語で描かれた比喩や形象、時制、言葉の対象から、詩編の思想や信仰を研究しております(ミュンヘン大学での博士学位取得論文は、詩編と知恵文学の関係性をテーマにした『人間の



はかなさと神の時間：詩編 90 編とコヘレトの言葉における時間の神学』で、ドイツの旧約聖書学研究所の歴史と伝統を継承しつつ、旧約聖書の知恵と思想との対話を試みました)。また、詩編がユダヤ教とキリスト教の伝統の中で、礼拝音楽やキリスト教絵画に影響を与えた時代背景や要因にも関心を持っております。

出身は愛知県の生まれで、家族全員学校教員の環境で育ちました。神戸国際大学経済学部卒業後、同志社大学大学院神学研究科博士課程(前期課程)に入学し、水谷誠先生、橋本滋男先生、小原克博先生の演習で修士論文をご指導頂く中で、上は 70 歳代の様々な世代のご経験をお持ちの学友や、牧会を目指す仲間にも出会い多くの刺激を受けました。そうした中で神学を学ぶ上で信仰の必要性を強く感じるようになり受洗しました。その後、博士課程(後期課程)に進み、野本真也先生の演習で、旧約

聖書研究に取り組み、ハンブルク大学ならびにミュンヘン大学で旧約聖書学研究所を志すきっかけを与えられました。「神学」を通して、世界の様々な国や地域の研究者と情報交換をされる神学部の諸先生の研究活動は、探求する私の刺激になりました。約 10 年間のドイツ留学を終えた後、名古屋学院大学国際文化学部、同大学院外国語学研究所国際文化協力専攻准教授を経て、現在に至ります。趣味は、スポーツジムでの運動と車の整備です。エンジンがかかる構造だけでも奥が深く、故障箇所の原因を調べて修理する一連の時間が好きです。

今後とも、同志社大学神学部にかかわる、多くの方々との良い交わりが得られますことを切に願っております。在学中にお世話になった諸先生と再びお会いでき嬉しい反面、一日も早く神学部で良い働きができるよう精進して行く所存でございます。今後とも宜しく願っております。

夏期伝道報告

樫 克也 (神学研究科1年次生)

「自分の信仰を改めて見つめなおすいい経験となった夏期伝道」

8月9日～9月10日まで、夏期伝道実習生として霊南坂教会で様々な学ばせていただきました。毎週水曜日の聖書研究祈祷会、夕礼拝奉仕、週報準備などの主日礼拝準備、中ティ科キャンプ、中ティ科の朝礼拝奉仕、小学科デイキャンプ・小学科の朝礼拝奉仕、教会員の方々とのキャンプ等を経験させていただきました。

この夏期伝道の中で一番自分にとっての糧となり勉強になったことは、自分の信仰がどういうモノなのかを改めて考えることができたことです。自分にとって神とは?、イエスとは?、聖霊とは?、十字架とは?、恵みとは?、贖いとは?、救いとは?…自分の信仰にとって今までなんとなく感じていたもの、あまり考えてきたことなかったもの、分かっているようで聞かれると戸惑うもの等を皆さんから改めてたくさん問われたように思います。夕礼拝の説教を考える中で教職の伝道師、副牧師、主任牧師に、君にとっての〇〇は何と問われる中で、各キャンプで信徒の皆さんが語る信仰生活や証を聞く中で、その一つ一つをその都度考えていく中で、今までになかった思いや考えに触れることができました。その中で今まで自分は浅はかな考えしかできていなかったのだと改めて自己省察することもできました。今回、この夏期伝道を通して問われたこの根本的な問いはたった1か月の実習だけで答えが出せるようなものでは全くないと思います。これからも私はこの夏期伝道で経験したこと、皆さんから問われたこと、自分にとって〇〇って何?という問いに人生をかけて考えていきたいと思っています。

一方で、この夏期伝道を通して、牧会者になることの喜びや楽しさも感じる事ができました。あるキャンプに行ったとき、そのキャンプの参加者の一人の信徒が証の中で今の自分にとっての一つの悩みを証してくださいました。それを聞いて、私は何気なくそのキャンプの終わりの祈祷をする時に、その方の悩みへの慰めの祈りをしたのですが、その後、その信徒さんからその祈祷の慰めの祈りに関する感謝をいただきました。私の何気ない祈りがこうして信徒さんの心の、魂の救済になるのかということを実際に実体験できた思い出深い記憶です。この喜びが牧会者であることの喜びなのだろうなと感じさせていただきました。この嬉しい思い出深い記憶を忘れず、これから牧会者としての道を歩みたいと思います。

この約1か月間で本当に多くのことを学び、成長できたように思います。この1か月で学んだことを忘れず、これからも勉学、信仰生活を育んでいきたいと思っています。



派遣神学生の声

藤田 和也
(神学研究科1年次生)

同志社教会に神学生として遣わされて、二年が経とうとしています。「派遣神学生」といわれると、週報作成や教会学校でのお話といった「土日」の奉仕を思い起こす方が多いのではないかと思います。もちろんそうした奉仕もありますが、私の場合は、教会の集会所(旧牧師館)に居住しながら働いているので、平日の働きが中心なものとなっています。集会所は二階建てで、私の居住スペースは二階部分です。朝起きて身支度を整えたら、一階で菅根先生と仕事をします。授業の時間が近づけば、自転車まで神学館まで向かう。終わると二階の「我が家」に戻るといった日々です。

教会ではもっぱら事務作業を担当しています。「事務作業」といっても色々ありますが、そのなかでも同志社教会特有



の業務が「礼拝会場の予約」というものです。ご存じのように、同志社教会は会堂を持たない教会です。栄光館ファウラーチャペルをはじめとする学園の礼拝堂を主日ごとに借りて、礼拝をささげています。役員会やクリスマス行事を開催するにしても、学園の教室を借りなければ、場所を確保できません。そのため、学内の関係部署に会場の空き状況を問い合わせ、申請書類を提出するという作業が必要になります。

このようにあまり表に出ない奉仕が中心なので、地味といえば地味ですが、いずれも主日を迎えるにあたり欠くことのできないものです。毎日教会で働くこと

によって、一週間後、一か月後、あるいは一年後の主日に向けて今何をすべきかという視点を養っているのは、よい学びです。神学生の住み込みに理解を示してくださっている教会員の皆さまには心から感謝しています。

業務とは直接関係ありませんが、よく仕事終わりや休憩時間に菅根先生やお連れ合いの洋子さんと一緒に食事をさせていただくことがあります。教会のことで色々相談に乗っていただいたり、神戸教会時代の話を伺ったりできるのは、貴重な時間です。また、平日の夕方になると、授業を終えた神学部の友人や教会の青年が集会所まで遊びに来てくれるのも、私にとってはよい刺激になっています。

同志社教会での任期はあと一年です。着任したときには有り余るほどの時間が与えられているように感じていましたが、実際にはあっという間の二年間でした。牧会者として現場に出る日を見据えながら、神学生としての残りの日々を大切にしていきたいと思っています。

卒業生
 から



山口 真実
 (2017年3月卒業)

私は卒業後、富国生命保険相互会社に就職し、早くも7年目になりました。3年ごとに転勤があり、現在は千葉の本社で働いています。打たれ弱く飽き性の私が今日もこうして同じ会社で働いていることに自分が一番驚いています。

生命保険会社と聞くと、どんなイメージをお持ちでしょうか？営業・ノルマ・根性、そんなイメージが強いかもかもしれません。しかし、実際に働いてみて感じるのは、生命保険会社はたくさんの「愛」で成り立っているということです。入社後まず教えられることは営業の大切さではなく、アフターサービスの大切さでした。誰かのお役に立てること、それこそが生命保険会社の本質だと教えられます。

私が神学部に入學した理由の1つは「愛」について学びたいと思ったからでした。中高キリスト教主義の学校で育ち、毎日聖書を読む環境の中で「愛って何だろう」と感じることもあり、感覚的に捉えているものを紐解いてみたい、そんな漠然とした目標をもって神学部に入學しました。実際の学生生活はというと決して真面目な生徒ではなく、所属していたゼミの中野先生には卒論完成までご迷惑をかけっぱなしでした。中野先生、その節は本当にお世話になりました。その後、就職活動を通して、誰かの人生の節目に関われる生命保険会社へ魅力を感じ入社を決めました。

私が現在所属している部署ではフ

リーダイヤルを受けるグループがあり、日々様々なご要望に接しています。その中で一番多いお申出は給付金のご請求です。淡々と余命宣告を受けたとお話される方もいれば、切羽詰まった状況を細かく伝えてくださる方もいます。素早く電話を切り上げ、機械的に書類を送付することもできますが、電話口の方が今どういう状況で、どんなお気持ちで電話してくださっているのか、常に相手の立場を考え、受け止める運営を徹底しています。私たちにとっては毎日何百とかかってくる電話も、お客さまからしたら何十年も加入して初めて掛ける電話かもしれないからです。そうしてお話を聞いた最後にいただける「ありがとう」は、どんな仕事にも変えられない重みを感じています。

働いていくには経験や知識も必要でまだまだ一人前になれる私ですが、神学部で学んだ、バックグラウンドを想像し、相手を受け止め愛を持って接することは常に意識しています。たくさんの感情に接する仕事で、自分を見失わず愛を届け続ける人であることをこれからも目指していきたいです。

新入生キャンプを振り返って

渡邊 桐香 (神学部4年次生)

これから神学部で学ぶ新入生のために、なにか自分にもできることがないかと思い、2年次生から新入生キャンプに関わらせていただきました。私が入學した年度から、コロナ禍によって泊りがけでのキャンプを実施することができなくなりましたが、それでも新入生同士が繋がりが持つことができる環境をつくってくださる先輩方の背中を見て、いつか私も先輩方のように、誰かのために動くことのできる人になりたいという気持ちが大きくなっていきました。そして、今年度、新入生キャンプリーダーという重要な役割をいただきました。今年度も宿泊は実施できなかったものの、少しずつ規制が緩和されていく中で、どこまで対面のイベントができるかを見極めることはとても難しく、判断の際には他のスタッフたちの意見に大変助けられました。

新入生に喜んでもらえるイベントとなっているかどうかという心配を抱えて、当日を迎えました。順調に開会礼拝を終えた後、突然の土砂降りに見舞

れ、急遽プログラムの順序を入れ替えることになりました。天候を考慮にいたした上での実施でしたが、思いのほか悪天候が続き、最終的には時間を繰り上げて終了というかたちを取りました。その場その場で決断を迫られるシーンが多く、オンラインでの新入生キャンプしか経験のなかった私は、予定通りプログラムを進行できなかったことに責任を感じ、もっと綿密な準備ができていれば、雨の日プログラムを別で用意しておけば、といった後悔の気持ちでいっぱいでした。しかし、キャンプ終了後に、新入生から楽しかったとの声を直接頂くことができました。ハプニングがあったものの、

このキャンプの目的である、新入生が新しい環境への不安を解消できる場とするということが達成できたようで、とても嬉しかったです。

神学部の伝統として続いているイベントが、情勢によって形を変えつつも継承されていく一場面に関わらせていただいたことに感謝しています。来年度もその先も、素敵なキャンプが開催できることをお祈りしています。



お知らせ

●2023年度卒業・修了生

・学部	43名
・大学院博士課程(前期課程)	8名

●2023年度入学者

(1)学部第1年次生	66名
(2)学部第3年次生	2名
(3)大学院博士課程(前期課程) 神学専攻	9名
(内社会人特別入試合格者2名)	
(4)大学院博士課程(後期課程) 神学専攻	1名
(内社会人特別入試合格者0名)	

◆2024年度 神学部・神学研究科役職者

学部長・研究科長	関谷 直人
教務主任	勝又 悦子
教務(国際)主任	三輪 地塩
教務(入学)主任	森山 央朗
大学院教務主任	村山 盛葦
	村上 みか
学生主任	木谷 佳楠
研究主任	村山 盛葦

◆人事

退職(2024年3月31日付)	
助教(有期)	三輪 地塩
採用(2024年4月1日付)	
准教授	三輪 地塩
准教授(有期)	黒柳 志仁

新社会人になって



坂本 緑咲
(2023年3月卒業)

NTT 西日本技術総合職採用として、NTT 西日本の設備部、NTT フィールドテクノで働いております、2023年神学部卒業生坂本緑咲です。

私は現在、奈良県の設備部にて勤務しています。今の職場は、先日の能登半島地震への支援があり、緊張感に包まれています。現在の業務は、NTT 設備におけるさまざまな知識が必要です。加えて、現在特に行っている業務では、インターネット接続に関わる周辺機器の知識が必要です。しかし、私は文系学部から設備部に

入ったこともあり、これらの知識を取り入れることに特に苦勞しています。設備を支えるために必須の資格や、社内試験の勉強、技術現場の知識の習得は、やはりまだまだ苦戦しており、現場の先輩方と共に働くことで、日本のインフラを支える先輩方の偉大さと自分の未熟さを痛感する毎日です。しかし、神学部で培った自分のタラントンを生かし、先輩方のように、日本の通信設備を支えることで、地域に貢献する人となっていきたいです。

新社会人になって



馬場 真緒
(2023年3月卒業)

私は今年度から地元の滋賀で県庁職員として働いています。初めての配属先は職員の福利厚生に関わる部署でした。直接県民の方々と関わる仕事ではありませんが、職員をサポートする縁の下の力持ちのような存在と言えます。

心身ともに健康で働き続けることは決して簡単なことではありません。疾病で働けなくなった際の生活はどうか、そもそも健康を維持するためには何ができるのか。私たちの部署ではそのための支援を行ったり、知識の

提供をしています。

特にメンタルヘルスについての取り組みの際にはカウンセリングや自己分析等も神学部で学んでいたことを思い出します。改めて大学では今まで知らなかった宗教の様々な役割を知ることができたのだと感じました。

県職員は部署異動が多く、配属先も多岐に渡ります。これから先どのような業務に携わっていくことになるかは分かりませんが、与えられた場所でそれぞれに応じた役割を果たせるよう努めていきたいと思っています。

事務室からのお知らせ

いつも『同神期報』をご講読いただきまして、ありがとうございます。
現在、神学部・神学研究科事務室にて『同神期報』を講読して下さっている方の住所管理を行っております。
ご住所・お名前の変更、講読に関するお問い合わせ等ございましたら、神学部・神学研究科事務室までご連絡ください。

なお、次号以降の講読を希望されない場合は **5月31日(金)まで** に神学部・神学研究科事務室まで FAX または E-mail にてご連絡をお願いいたします。

同志社大学 神学部・神学研究科事務室 FAX: 075-251-3072 E-mail: ji-sinjm@mail.doshisha.ac.jp

2023年度 大学院博士課程（前期課程）修了者論文題

聖書神学研究

具 本曙 【特定課題想定題】サムエル記上 17 章 57 節—20 章 42 節を題材にした漫画の制作
大塚 勁 貧しい者への福音—イエスの宗教的・社会的背景—

歴史神学研究

尹 相優 堀井順次のヘテロトピア的思想と国家観—満州キリスト教開拓団と敗戦の経験を中心として—

組織神学研究

大槻 茂勝 神の時間は存在するか
澤田 果歩 自尊感情を育むキリスト教教育の可能性—包括的性教育を手がかりとして—
張 夢妍 エコロジカル・フェミニスト神学の日本社会への適用—S. マクフェイグを中心に—

一神教学際研究

草薙 千夏 従軍ラビの活動がイスラエル国防軍（IDF）に与える宗教性
鳥居 佐恵 女性の兵役に対する宗教シオニストの共同体の反応

2023年度卒業論文のなかから

- J・L・フロマートカの受肉論—『人間への途上にある福音』を中心に—
- 暴走する能力主義と「共通善」としての宗教
- 賀川豊彦はジョン・ラスキンをどのように受容したか
- 古代イスラエルにおける石柱（מצבה）の機能に関する一考察
- 優生思想と現代日本社会—ドイツの過去の反省との比較から—
- ガザーリー神学思想における愛論の特徴と位置付け
- アメリカ人の宗教観—ロバート・ベラーを通じて—
- 「名誉」とはなにか—騎士道と武士道の比較から—
- 潜伏キリシタン関連遺産とダークツーリズム—巡礼地の観光資源としての利活用—
- フランス・カトリック教会における権力構造とその変遷—子供への性的虐待を巡って：教会とカリスマの失墜と sacrament による隠蔽—
- 日本における風呂文化の歴史と銭湯の減少について
- 「マルタとマリア」物語から考える「性役割」—ルカによる福音書 10 章 38-42 節を中心に—
- キリスト教とインド思想とに見られる行為論の比較研究—『ルカによる福音書』第 17 章 7 節から 10 節に見られる「行為」を中心に—
- キリスト教と農業教育—農民福音学校とブラジル土地なし農民運動の比較から—
- ミスター・アール・ヌーヴォーとその志向—ミュシャに見るアール・ヌーヴォーとカトリック、東欧ナショナリズム—

2024年度 入学試験 志願者・合格者数一覧表

	募集人数	志願者数	合格者数
推薦選抜入学試験	14名	30名	14名
自己推薦入学試験	6名	40名	6名
キリスト教主義学校の連携ネットワーク推薦入学試験	5名	4名	4名
法人内諸学校推薦入学試験	5名	5名	5名
外国人留学生入学試験	若干名	1名	0名
一般選抜入学試験	31名	284名	79名
大学入学共通テストを利用する入学試験	2名	42名	7名
第3年次転入学・編入学試験	若干名	2名	1名
神学研究科 博士課程（前期課程）入学試験	春秋合計20名	8名	5名
神学研究科 博士課程（前期課程）社会人特別選抜入学試験	若干名	4名	2名
神学研究科 博士課程（前期課程）外国人留学生入学試験	若干名	0名	0名
神学研究科 博士課程（後期課程）入学試験（春期実施）	5名	1名	1名
神学研究科 博士課程（後期課程）社会人特別選抜入学試験（春期実施）	若干名	3名	1名
神学研究科 博士課程（後期課程）外国人留学生入学試験	若干名	0名	0名

教会等赴任者 2024.3.1現在

この春、2名の方が宣教の現場に巣立っていきます。

大塚 勁（日本基督教団 南山教会）

大槻茂勝（日本基督教団 元浦河教会、浦河教会）（予定）

2022年度【神学部】主な就職先

国家公務員（一般職）
滋賀県
西日本電信電話株式会社
ヤマト運輸株式会社
興和株式会社
京セラコミュニケーションシステム株式会社
オムロン株式会社
大和ハウス工業株式会社
株式会社ニトリ
株式会社イトーキ
味の素株式会社
モロゾフ株式会社
太陽生命保険株式会社
医療法人糖心会
国立大学法人浜松医科大学

STAFF ROOM

研究室から

アダ・タガー・コヘン

神学部の教授として20年目を迎えることができ、非常に嬉しく思うと共に、皆さまに感謝申し上げます。昨年は研究のため、ドイツのエアフルト大学を約1ヶ月間訪れ、非常に興味深いワークショップに参加しました。また、同志社大学でもカンファレンスを主催しました。その中で最も規模が大きく成功を取めたカンファレンスが“Garden, Orchard and Nature in Jewish and Japanese Culture, Literature and Religion (ユダヤと日本の文化、文学、宗教における庭、果樹園、自然)” (CJS12) でした。このカンファレンスはベングリオン大学のヘクシェリム研究所の協力を得て開かれたもので、日本、アメリカ、オランダ、イスラエルの14人の学者らによる発表がありました。今年はユダヤ研究のための特別な寄付が神学部の卒業生からあり、8月には3人の学生をイスラエルでの発掘調査に派遣し、秋には広島近郊のホロコースト記念館訪問ツアーも企画しました。年の後半は心が痛む時となりましたが、良い未来が訪れることを願っています。

越後屋 朗

1993年度から「旧約聖書学入門1・2」(途中で現在の科目名に変更)を受け持つしてきましたが、今年度をもって担当を外れることになりました。同様に「旧約聖書解釈学1・2・3・4」もです。2024年度からは新任の黒柳志仁先生が担当されます。先生は本学に学生として在籍され、特に野本先生から指導を受けた方です。黒柳先生をよろしく願っています。私は退職の年齢に至りましたが、定年延長を認めていただき、黒柳先生の神学部での初年度をお手伝いさせていただきます。ほんの少しだけですが、ローヴィジョンということもあり、研究は長らく足踏み状態。むしろ後退という

べきかもしれません。論文を寄稿した『「ナル的表现」をめぐる通言語的研究』、それとダビデ王に関する英書の翻訳が今年中に出版される予定です。遅れずに出てほしい。

勝又 悦子

教務主任の任を受け、カリキュラムマップ・カリキュラムツリーの作成、カリキュラム見直し…と「カリキュラム」に追いついて立っています。同時に、学生にとって意義ある「自由な学び」を検討する機会です。3月には、反ナクニヤフデモに揺れるエルサレムを訪れ、8月には、イスラエル北部テル・レヘシュの発掘に参加し、イエスと弟子たち、また、私が扱うユダヤ文献のラビたちも歩いたであろう大地に触れ、勝手に感慨に浸ること、しばし…。そして、10月7日の惨劇とその後の戦争による甚大な犠牲者、偏向的な報道に心痛めています。11月には福山市のホロコースト記念館に訪れました。発掘や記念館への訪問には、ユダヤ学教育研究促進寄付金の助成を学生ととも受けたことを感謝します。で、ふと気づくと論文書いてない…。慌てて、論文に取り組んでいます。間に合うか?今年も阿鼻叫喚な年度末です。『本のひろば』にて、ユダヤ教、イスラエルを知るための3冊を紹介します。

木谷 佳楠

昨年末に、1年ほど締め切りを延ばしに延ばして、いよいよ編集者から見限られそうになっていたOxford Handbookシリーズへの依頼原稿をようやく提出しました。内容は北森嘉蔵の『神の痛みの神学』について焦点を当てたものです。北森の神学は、旧約聖書のエレミヤ書31章20節で、神がエフライムを思うあまり

「我が腸(はらわた)彼の為に痛む」と表現する一節が基盤になっています。やがてこの聖書箇所は、「わたしの心は彼をしたっている」(口語訳)、「私の胸は高鳴る」(新共同訳)と翻訳され、神は痛まなくなってしまう。このように、時代ごとの聖書翻訳に依存する神学もあるということを改めて考えました。日本の神学教育の現場では、日本の神学に焦点を当てた授業は少ないのが残念ですが、私が学生の頃に小山晃佑を紹介してくださったのは越川弘英先生でした。先生が今年度でキリスト教文化センターを退職されることは何とも寂しいことです。幸い、今後もしばらく講師として実践神学の科目を担ってくださるので、学生の皆さんは今の内に越川先生の授業を履修してください。

小原 克博

2023年度は「紛争や戦争はなぜ起きるのか—宗教の視点から戦争の原因と抑止を考える」(『まなぶ』2023年3月号)などの小さな論考を執筆した他、政治と宗教、旧統一教会問題、宗教2世などに関連して各種のメディアに対応してきました。政治、宗教それぞれに、また、その間に広がる「闇」の深さに驚きつつも、そこに少しずつ「光」があてられてきた一年ではなかったかと振り返っています。

2023年10月、テュービンゲン大学の先生方20名ほどが同志社大学に来られました。その際、神学者でもあるPollmann学長と同じワークショップに登壇し、“Metaphor, Allegory and Truth in Doshisha Founder, Joseph Hardy Neesima: Interreligious and Intercultural Perspectives”というテーマで発表しました。その他、2023年度には以下のような講演を行いました(抜粋)。「地球環境問題と宗教」(慶應義塾大学 経済学部)、「新島襄の精神とその現代的展開」(日本ピューリタニズム学会)、「宗教と医療をめぐる歴史と課題」(高知大学 医学部)、「AI と共に知る「良心」が拓く未来—同志社大学の新たな貢献」(良心学研究センター)。

2024年度も、公務の合間に研究や執筆活動が続けたいと願っています。

三輪 地塩

2023年度も無事に過ごすことができました。諸先生方ならびに神学部事務室の皆様のお支えと励ましを給わり、心より感謝いたしております。

今年度は、人文科学研究所第3研究会の研究発表「植村海老名論争研究史試論」(5月)、日本基督教会学会学術大会内の座談会「コロナ禍で立ち現れてきたもの一身体と祝祭」での発表(9月)、京都大学地塩寮の講演会「長崎原爆言説の相克―浦上キリシタン・被差別部落・永井隆」(12月)などを行いました。また、『基督教研究』(85巻2号)に講演録「キリシタン研究の現在―キリシタン・イメージの形成とキリシタン・ブームに関する考察」が掲載されましたので、ご笑覧頂けると幸いです。科研費研究「明治以降の近代日本における信仰遺物の語りと記憶の研究」では、昨年8月に長崎県五島列島のフィールド調査を実施し、五島全てのキリシタン言説と遺物を広く調査することができました。研究成果としての論文・報告について今後進めて行く予定です。

森山 央朗

論文などが公刊されるまで、私の場合、書き始めてから3年くらいかかります。遅筆に加えて、提出後に一旦リジェクトされて再投稿になったり、編集から修正・改稿を指示されることも多く、入稿してから校正などに半年くらいはかかるためです。

ということで(?)、2023年に刊行された研究成果は、東京大学東洋文化研究所の『東洋文化』第103号に掲載された「スンナ派伝承主義者にとってのアリー崇敬」と、小二田章編『地方史誌から世界史へ:比較地方史誌学の射程』(勉誠社)に所収の「ムスリムたちによるアラビア語地方史誌の色々」の2点のみでした。ちょっと情けない気もします。

2024年は、調子を上げて研究にも取り組み、論文の仕込みなども堅実に進めていきたいと思います。そのためには、今この時を大事にしなければならないのですが、それがなかなか難しかったりもします。

村上 みか

今年もフィールド・ワークを通して、歴史を体感する学びに取り組みました。ドイツ・テュービンゲンでは昨年度に引き続き、ローマ教会が宗教改革を経てプロテスタント教会に変わる歴史の足跡を、今なお残る教会の中に確認し、さらに街の中でも、キリスト教と政治・文化・大学の関わりを身近に知ることができました。学部や院のゼミではともに美術館を訪れ、絵画を鑑賞しつつ宗教と美術について考える時をもちました。また、学部ゼミでは教会を訪問して教会員ともお話しし、若者が教会に集まらない理由について議論しました。

9月には日本基督教会学会のシンポジウムで「宗教改革期における公共神学」について、11月には日本ルター学会で「再洗礼派をめぐる神学議論―ルターとツヴィングリを中心に―」と題して発表を行いました。日本ルター学会では、「再洗礼派500年」(2025年)を前に、再洗礼派研究者と共同して神学的な和解の作業を進めています。『1冊でわかるキリスト教史』が5版を重ねます。ご関心のある方は、ぜひお読みください。

村山 盛葦

2023年度も健康が支えられ無事に終えることができ感謝です。今年も学部の研究主任として『基督教研究』の発行や図書室2階展示コーナーの作成をしました(テーマ:『基督教研究』100周年を覚えて。ホームページで閲覧可能)。研究の方は、コリント教会で行われていた死者のための代理洗礼について論考を行いました(「『死者のための代理洗礼』(1コリ15:29)についての一考察」『基督教研究』85巻・1号(2023年) pp.1-16)。

教会関係では、洛西教会(12月)、阿倍野教会(12月)、南山教会(1月)において礼拝説教を担当しました。また、1月には中部教区愛知西地区の全体研修会、教師研修会(1泊2日)において最初期のキリスト教の歴史およびパウロ書簡を通して「教会」について、共に学び理解を深めることができました。テキストを平面ではなく、立体的に読み解いていくことの大切さを共有することができました。

神学部の教員スタッフは世代交代の時期を迎えています。次世代につなげていく橋渡しの役割を担っていきたく思います。

中野 泰治

2023年度は翻訳に明け暮れた年でした。17世紀のクエーカーの神学者ロバート・パークレーの組織神学書『真のキリスト教神学のための弁証』(1678年)が三恵社から出版されましたが、そのほかにもパークレーの手によるクエーカーの教会論である『ランターズと自由主義思想家の無政府主義』(1674年)(+万人救済論と無条件の愛について説いた『普遍的愛』(1677年))、およびクエーカーの『教理問答と信仰告白』(1673年)の翻訳が終わり、夏までには出版される予定です。『弁証』は本格的な神学書なので、17世紀の神学に精通していない人には読みづらいものがあるかもしれませんが、『教理問答と信仰告白』は聖書の言葉を用いて若者向けに書かれたものなので、初期クエーカーの信仰を最初を知るには一番の書籍だと思います。また、2023年の日本ピューリタニズム学会で発表した内容をまとめた「新渡戸稲造とニューソートについて―従来の「クエーカー」像の問題点―」を『基督教研究』の春号に投稿予定です。

関谷 直人

この年度は私生活において、中間管理職的な役割を演じることが多い年でした。この3月で91歳になる母親(実家で一人住まい)は、この年になるまで割合と元気でしたが、この一年間の間に徐々に弱ってきて、ケアマネさんと面談したり、介護プランの確認などをすることが多くなりました。一方で、娘・息子たちの子ども(つまりは、私の孫)四人も確実に成長し、日頃の接点はあまりないので、手はかかりませんが、「経済的接点」は増える一方です。神学部の教員としては相変わらず「牛歩」ですが、今年度は教会におけるハラスメント関連の講演を日本基督教団の「新任教師オリエンテーション」や奥羽教区の「信徒研修会」奈良分区の「教師研修会」などで行いました。説教奉仕は梅花教会、北六甲教会創立記念礼拝、京都教会説教、尼崎教会創立記念礼拝、西陣教会創立記念礼拝などで行いました。

牧会者準備セミナー

岡本教会牧師 / 同信伝道会教職養成部門委員長 栗原宏介

2024年2月27～29日、同志社大学の神学館を会場として「牧会者準備セミナー2024」が開催されました。神学部と同信伝道会（教職養成部門）の共催として15年ほど続いているこのセミナーは牧会を志す学生と牧会経験3年目までの方々を対象としています。このセミナーは、いわゆる職業訓練的な「技能を教える」セミナーではなく、牧会の現場に赴いていく不安や牧会現場での戸惑いや課題を同僚の友と共有し、希望を新たに持って、再びそれぞれの現場へと帰って行くことができるように、出会いと交わりの機会を提供し、リフレッシュできるようにとの願いを持って実施されています。

今回は13名（学生5名、教職8名）の参加者が与えられ、スタッフ・講師を含めると26名での開催となりました。開会礼拝は神学部の関谷直人先生によって執り行われ、その後、越川弘英先生を講師として神学講演が行われました。講演題は「次の四半世紀における教会の課題と展望」。日本の人口推移や内閣府のムーンショット目標などを入り口として、教会のこれからの姿が提示されました。また、『教団年鑑』にある現住陪餐会員数や礼拝出席者数、牧師数や教会数などの各種データの分析から、決して明るくない困難な状況を確認し、数字に見えるコロナ禍の影響なども共有しながら、だからこそ今後教会は、そして、牧師はどうあるべきかを考える機会が与えられました。数字だけを見て暗澹たる思いに沈んだかと言えばそうではなく、むしろそこから新たな課題が示されて、そこに希望や展望を与えられました。例えば、教会



間や牧師間の共同・協力の促進のあり方や“その教会”の神学（ローカルな神学の確立とそれに基づく教会形成）の重要性など、様々な視点を得ることができました。

神学講演に続いて、3名の講師によるリフレッシュセミナーの時間があり、淀川キリスト教病院の安部勉先生には「バストラケアと病院の働き」と題して、世光教会の新井純先生からは「幼児施設のある教会のリアル」と題して、同志社女子大学の中村信博先生からは「アブラハム物語を読む—教会倫理と社会倫理の対話のために—」と題してお話いただきました。参加者には自分の興味・関心のあるテーマを選択して受講いただいて、それぞれに実りのある時間となりました。安部先生からは病院という実践の現場においてのお話をうかがい、新井先生からは、もしかすると牧師を志した時には想定していなかった付帯施設における働きのお話をいただき、中村先生からは、牧会現場で聖書をどう読むのかということをお話いただきました。

2日目には主題講演者として神戸愛生伝道所／北須磨教会の竹内富久恵先生にお越しいただき、「むしろ過渡期でいいのかも」と題してお話いただきました。教会と施設の働きの中で苦闘しつつ牧会の働きを担い、また、新型コロナウイルスの感染拡大によってより厳しい状況になっている中で起こっている出来事をお聞きすることができました。竹内先生のお話は、私たちに考える機会を与えてくれるものであり、時にあり方を問われるものでもありました。「無自覚に他者を

抑圧し排除していることがある」ということについては、本当に自らを省みなければいけないと思われました。スタッフを含め参加者は等しく皆それぞれの現場で課題があり、葛藤し、悩み、苦慮しています。そうした不安定な現実の中で「むしろ過渡期でいいのかも」という言葉は、安らぎと励ましに満ちているように感じます。過渡期であればこそ感じることができるとの導きと恵みがあるということに改めて知ることができました。

各種の講演のほかに参加者によるワークショップの時間も設けて、近況を聞き合い、また、それぞれが抱える課題や思いといったものを共有いたしました。牧会者の牧会が誰がするのか、日ごろの働きの中で話を聞いてくれる人はいるのかなど、ともすると孤独に陥りやすい牧会現場での働きの根本的な課題も見出しつつ、こうして話を聞き合える同僚の友がいることは恵まれたことだと気づかされました。

プログラムの最後は、バザールカフェで昼食を共にし、その後、同志社教会の菅根信彦先生によって閉会礼拝が執り行われて3日間のセミナーを終了いたしました。

参加された方々が、それぞれに得た思いを現場へと持ち帰って、より良い働きをなしていくことができるようにと心から願っています。

最後になりましたが、このセミナーの実施のために多くの方々からお支えいただき、また、お祈りいただきましたことをこの場を借りて感謝いたします。どうぞ今後ともよろしく願っています。



トピックス

三宅威仁著、小説『八色 ヨハネ先生』（文芸社、2023年）

第2回Reライフ文学賞において、全国1878件の応募の中から長編部門の最優秀賞に選ばれました。学生時代に小説家を目指された三宅先生による快挙です!!



授賞式 於 ロイヤルパークホテル

三宅先生を存じあげる私にとって、主人公八色ヨハネ先生はまさに三宅先生!?と一読して感じました。設定はすべて創作ですが、クスッと笑える



三宅イズムがあり、何よりも物語に底流する神学的なモチーフ、そして、クライマックスで展開する神義論と復活理解が圧巻です。

授賞式後のスピーチで、三宅先生は「自分の生き方を変えることによって、その不幸を乗り越えることができたような人物」を描きたかったと述べておられます。

「同志社大学神学部元教授・八色ヨハネ先生は去る十一月一日に、一人暮らしをしていた大阪市西成区のアパートで死亡しているのが発見された。」の一文で始まるこの作品は、有限の生、人生の理不尽さ、そして、その意味と素晴らしさを読者一人ひとりに考えさせる機会を与えてくれます。ぜひ、手に取って読んでみてください。ちなみに、11月1日は三宅先生のお誕生日です（笑）。（村山盛華）

神学部公式Xアカウント「@STheology_DU」を開設しました。神学部に関する雑多な情報を発信し、本学部に対する社会的認知の拡大を目指します。積極的なフォローと拡散をお願いします。ただし、入試や履修登録などの重要事項については、大学公式サイトなどの確認を怠らないようにしてください。（森山央朋）

